

# ルイス・マンフォードの 全体像

## 略歴にみる試論

三木 馨 <企画調整局プロジェクト室副主幹>

### 1 はじめに

ルイス・マンフォードを読みはじめて久しくなる。読めば読むほど、奥行の深さ、幅の広さに感心する。これはマンフォードの学問領域の広さと専門領域の不明瞭さのなせるわざであろう。マンフォード自身、自分の学門・専門領域について『歴史の都市、明日の都市』や『現代都市の展望』の中でゼネラリストと自から称し、次のように定義している。

「人生と思想の多くの異った領域に等しく通じているいわゆるゼネラリストとしての資格……つまり、私の専門は、分散化した各専門領域を統合して専門家がまさしく小さな対象への過度の集中のゆえに、すっかり見落していたり、あるいは故意に無視し去ってしまうことの多い総合的パターンをつくりあげていくことなのである。私はゼネラリストであれ何であれ、単一の分野の専門家ではないので、都市の研究もこれまでのところ私の思考生活の一部を占めるにすぎない」。更に後者では、「自分の資格ががざられていることについておことわりしたわけですが、私には正真正銘の資格が一つあるように思います。それは不幸なことに未だ珍しいものでありますが、人生と思想の多くの異なった領域に等しく通じている、いわゆるゼネラリストとしての資格であります。つまり私の専門は分散化した各専門領域を統合していったり、あるいは故意に無視し去ってしまうことの多い総合的パターンをつくりあげていくことなのです。」

それだけに、マンフォードの全体像を把握することは難かしい仕事である。マンフォードの全体像を把握するためには、これまで出版された膨大な著書をたんねんに

繙く以外にはない。そして、マンフォードが関心を示したそれぞれの分野についての考え方を整理してみる必要がある。即ち、マンフォードの歴史観、都市観、人間観、文学観、文明観、機械観等々について、それぞれ詳細に論ずる必要がある。私自身前述の種々の観点について研究ノートをとっているが、ここでは紙数もなく、個々の論点を明確にする余裕はない。とりあえず、マンフォードの略歴を中心におきながらその活動、著述態度及びその著作のバックグラウンドや著書の内容のコメントを書き、マンフォードの全体像の概略を描いてみる。

### 2 文明批評家としてのマンフォード

ルイス・マンフォードを20世紀が生んだ最大の文明批評家であると評したらほめすぎであろうか。今日まで、文明批評については多数の人々が行ってきたが、マンフォードほど幅広く奥深く長い期間にわたって精力的に継続しているものは少い。仮にいたとしても、専門領域が限定され視点の片寄っているものが多い。例えば、アーノルド・トインビーにしても歴史家としての立場を出ず、ポール・ヴァレリーにしても文学者としての色彩が強い。パートランド・ラッセルが稀有な一人といえよう。マンフォードの文明批評家としての特徴は“学際的”ともいえるところにある。我が国においてマンフォードの著作の大部分を翻訳発表し、かつマンフォード研究者の第一人者である東大の生田勉教授は『人間の条件』の解説の中でマンフォードの特異性をみごとに描いている。

「20世紀の思想家とはちかごろはやりの言葉だが、まさしくその名に値する思想家がここにいる。20世紀の前半を綿密に分析し、解明して、20世紀の後半を期待と危惧とを人類の運命に織りまぜつつ、展望し予見しながら、20世紀の midpoint という頂に立っている思想家がいる。その名をルイス・マンフォードという」。これほど簡単明瞭にマンフォードを生々ととらえている文章には、まだ出会っていない。さらに生田教授は、マンフォードと他の文明批評家との相違についても次のようにいっている。

「ラッセル等の僅少な例外を除き、大部分は近代文明そのものについてほとんど何一つ知らない素人が多いが、彼等には技術や科学についての具体的な知識に欠け

ていたから抽象的観念の羅列だけに終らざるをえなかった」と。

このように長々と生田氏の文章を引用するまでもなくマンフォードがこれまで発表した著書リストをみれば、その活動力・執筆力に圧倒されよう。またその一冊一冊が、その時代における問題提起になり各方面の注目を集め、世界各国に翻訳され続けていることは驚くほどである。

これまでに出版された著書を概観してみると、弱冠27歳の時『ユートピアの系譜』を出版してから、今日までに24冊の大著書を出し、この間数多くの論文を執筆している。マンフォード自身、この数多い著書、論文の執筆について、「専門家としての職業をもたず著述業を主としていた人間にとっては最低のものである」としている。それにしても驚くべきスタミナである。参考までにこれまで出版された著書のリストを年代別にみると次の通りである。(我が国で出版されているものは、その題名による。)

- 1) 1922 『ユートピアの系譜』 The Story of Utopias.
- 2) 1924 Sticks and Stone: A Story of American Architecture and Civilization.
- 3) 1926 The Golden Day: A Story in American Experience and Culture.
- 4) 1929 Herman Melville. (ハーマン・メルヴィル)
- 5) 1931 The Brown Decades: A Story of the Arts in American 1865~1895.
- 6) 1934 『技術と文明』 Technics and Civilization.
- 7) 1938 『都市の文化』 The Culture of Cities.
- 8) 1939 Man Must Act.
- 9) 1940 Faith for Diving.
- 10) 1941 The South in Architecture.
- 11) 1944 『人間の条件』 The Condition of Man.
- 12) 1946 Values for Survival.
- 13) 1947 Green Memories.
- 14) 1951 『人生の案内』 The Conduct of Life.
- 15) 1952 『芸術と技術』 Art and Technics.
- 16) 1954 In the Name of Sanity.
- 17) 1956 『多層空間都市』 From the Ground Up.
- 18) 1956 『変貌する人間』 The Transformation of Man
- 19) 1961 『歴史の都市, 明日の都市』 The City in History.
- 20) 1963 『都市と人間』 The Highway and the City.
- 21) 1968 『現代都市の展望』 The Urban Prospect.
- 22) 1967 『機械の神話 (I部) 技術と人類の発達』 The Myth of the Machine I  
—Technics & Human Development.
- 23) 1970 『機械の神話 (II部) 権力のペンタゴン』 The Myth of the Machine II,  
—The Pentagon of Power.
- 24) 1973 『解釈と予測』 Interpretations and Forecasts 1922—1972

以上のうち雑誌論文を集めたもの7冊、残り17冊は全て書き下し単行本として出版されたものである。1971年、エルマ・S・ニューマンが、マンフォードが1914~1970年までに発表した全著作に関する目録を一冊にまとめ出版している。これはマンフォードの研究者にとっては必読のものである。

このような膨大な著書にもかかわらず、“Green Memories” 以外は今でも全部出版されており容易に入手できるという。『ユートピアの系譜』等は、出版以来一度も絶版になったことがなく、また初期の作品は、最近、新しい序文をつけてペーパー・ブックとして再出版されている。それだけに、マンフォードの思想や問題提起のしかたが、なお今日的であり、いかに“無駄な本” を書いてこなかったかがうかがえる。この他、1914~1970年の間に636編の雑誌論文を発表している。ただ、『権力のペンタゴン』のように同じ論文が3~4回雑誌に掲載されたものも含まれている。マンフォードが定期的に論文を執筆しはじめたのは1920年以後で、現在まで約55年間、長短の別はあっても、毎月1編以上の割合で論文を書き、大部な著書については、2年に1冊の割合で出版している。加えて、数多くの書評(約223冊)を行い、この書評も大論文が多く、それぞれ十分に読みごたえがあるとされている。また、マンフォード自身が語っているのであるが、量的には著作全体に匹敵するような書簡集がある。なかでも文芸批評家ヴァン・ブルックスとの42年間にわたる書簡集と、イギリスの都市計画家フレデリック・オズボーンとの32年間にわたる書簡集が公版されて

いるという。不幸にして邦訳は出ていないが、いずれも400ページをこえる大部なものであるらしい。

前述の著書リストをみればわかるように、マンフォードの専門領域は広く、なかでもその特徴をあらわしているものに文学に関する力の入れ方がある。“白鯨”の著者『ハーマン・メルヴィル』論は、アメリカにおける“メルヴィル”論の数少ない最良の研究書であるといわれている。さらに“エマソン”に関する研究もあり、『エマソンの日記』の編集も実際にたずさわっている。(日本においては北村透谷の研究が優れている。岩波書店版、透谷全集Ⅲ参照)。この他最近出版された『解釈と予測』の昌頭の第一、第二章をみると、ソロー、ホイットマン、ルソー、等々にも関心を持ち研究していることがうかがえる。幼少時には作家になることを夢みたとするほど文学的センスがあり、それが出版された全著書の語り口にも現れている。ある人は、ポール・ヴァレリーの詩文と比較しほめたたえているほどである。現在では、“自伝”を執筆しながら時折講演等に出席しているという。最近“M. I. T.”で行った講演は好評であったという。

### 3 略歴にみるマンフォードの活動

**1895年** 10月19日、アメリカ、ロングアイランドのフランシングに生れ、ニューヨークのウエスト・サイドで育つ。先祖はイギリス系、ドイツ系の両方にまたがり幼年期においてはドイツ系の影響が大きかったため、ドイツ語も英語と同様に親しみ、家庭における食物もドイツ系のものが多く、全般的にドイツ的であったといわれている。

**1901年** パブリック・スクールに入学、模範生タイプであったが、高校に進むにしたがい興味の範囲が広がり、学業成績は落ちる。この時期にすでに今日のマンフォードのゼネラリストとしての芽が現れ始めている。とくに電気技師になることを希望し、一方、書くことにも興味を持ち始め、将来は作家が新聞のレポーターになることを望んでいた。

**1902年～1906年** シテイ・カレッジの夜学で勉強する。マンフォードは生涯(欧州旅行や第一次世界大戦の従軍を除いては)ニューヨークを離れたことがなく、ニュー

ヨークをこよなく愛し、生活し、思索しつづけている。

**1912年～1918年** ニューヨーク市立大学、コロンビア大学に学ぶ。専攻は「社会学」。1914年ニューヨーク大学で、生物学の研究中“パトリック・ゲデス”教授と出会う。この出会いはマンフォードの今日を決定したほど重要な意味がある。人間の一生には、必ずといっていいほどこのような機会がある。それがマンフォードのように師になる人であったり、たんなる友人であったり、あるいは重大な事件であるかもしれないが、その偶然性が人間の一生を変え、決定づけてしまう。それだけに人生は面白い。

マンフォードの師である“パトリック・ゲデス”については、都市計画を専攻する者なら一度は必ずどこかで出会っている。しかし、名前の割には知られていない。その略歴をみると、ゲデスは、スコットランドで生れ、生物学者であり、都市計画学の創設者でもある。ゲデスの都市計画の特徴は都市を実地に踏査する学派〈実証主義派、現物中心主義派〉ともいわれ、都市の実態をいろいろな角度から実地にしらべたり、調査するやり方を提唱した人である。また、ゲデスは初めは植物学者としてスタートし、進化論についてすぐれた研究を行い、その生物学的側面からアプローチした都市計画学が特徴とされている。即ち都市を生物学という視点に立ち関連づけ論じた。ゲデスの主著は『進化における都市 (Cities in Evolution 1913)』であり、その中で「人間が生き新陳代謝をし、生殖し、世代が交替するように都市もある周期をもって成長し、変化して遂には死滅する一個の有機体と考えられる」と述べている。この主唱は、それまでのユートピアン達の空想的、静態的、絵画的、幾何学的な形にはまった格子パターンや図形として都市をとらえるのではなく、人間や社会を広く把握し、生々とフレキシビリティに富んだダイナミックな都市としてとらえているのである。まさしく現代に通ずる都市論である。

このような、ゲデス教授の思想に感化をうけ、またゲデスが常日頃から主張する「自分の目と足によって、都市を実地に調査するよう進めた」ことなどから、若いマンフォードはニューヨークの町を毎日のように歩き廻り、ニューヨークの街はすみからすみまで、埠頭、工場地区広場、公園、貧民街、繁華街、大きな街路、博物

館、美術館、図書館、劇場、スタジアム、映画館等々をみてまわった。後にマンフォードは、その当時をふりかえって、次のようにいっている。「ニューヨークのメトロ・ポリスは、すでにスプロールし、まとまりのない形をしていたが、それ自体が〈巨大なエネルギーを生み出す発電体のよう〉であり、一方都市自からが、時代のさまざまな堆積層をもつ“博物館”のような存在であり、したがってメトロポリスそのものが大学以上に偉大な（教育の場所）であり、大学だけでなく自分の住む都市全体を自己形成の場として考えていた」と。

さらにマンフォードはニューヨーク市に次いで、フィラデルフィア、ピッツバーグ、ボストン、ロンドン、エディンバラ、ホノルル、パークレー等といった大小さまざまな都市を調査し、研究しつづけた。

マンフォードの都市についての著述はこのように足でかせいだ実地調査の上になつて生れたもので、それだけ特徴的である。また1916～17年にかけて、いろんな工場の実験室の調査研究を行い、1918年にはアメリカ海軍のラジオ技師にもなっている。一方、大学で「社会学」を研究する課程で、ユートピアン達——トーマス・モア、ベーコン、ガベー、カンパネルラ、フーリエ、ペラミ、ウィリアム・モリス等——のイデオロギーや思想を学びゲデスの影響による都市の実地調査が加味され、その「社会学」の研究はさらに深まり、やがては「ユートピアの系譜」としてまとめられていくのである。この間もものを書きつづけていたが発表する機会はなかった。しかし、あきらめずに“劇作”することに最大の望みを託し努力していた。

**1919年** “ダイマル誌”の編集を引きうけることになり劇作家になることは断念する。

**1920年** 半年間ロンドンに滞在し、ゲデス教授の同僚であるヴィクター・ブランフォードの招きにより「社会学評論」の編集長代理を勤め、ここでの経験をもとにニューヨークに帰るとフリーランサーとして精力的に物を書き始め、それ以後在野の文明批評家として一生を貫き通している。

**1922年** ハロルド・スターン編『アメリカ合衆国の文明』に論文が掲載されるこの年、『ユートピアの系譜』が処女出版された。弱冠27歳であった。

『ユートピアの系譜』は、理想の都市とは何かを語り（都市とは文明のこと）、この本には後年のマンフォードの全著作の萌芽がすべてみられる若々しい活力にみちた文章は、一気呵成に書いたといわれるだけに、気負いもみられるが、それだけに全体的に覇気がみなぎっている。マンフォードの到達した結論は『生への信念』の中でわざわざ一章のテーマにしている“人生はユートピアよりすばらしい”という言葉に要約される。ここでもマンフォードが如何に人を愛し人生を楽しんだかをうかがうことができる。

**1923年** 都市に関する研究課程で一群の人々と親しくなり、20代の若さで、「アメリカ地域計画協会」を創設しまとめ役として書記長を引受ける。

この協会の指導者であるクラレン・スタインやヘンリー・ライトは所得層の異なる人々のための住宅団地計画を提案し、ロングアイランド市のサニーサイド・ガーデンに実験団地を建設し大成功をおさめた人々である。マンフォードは〈グリーン・ベルト・シテイ〉や〈リージョナル・シテイ〉などの概念や〈パーク・ウェイ〉とか〈ハイウェイなしの都市、都市なしのハイウェイ〉などに共鳴している。この集団の最年長者はベントン・マッケイであった。「アメリカ地域計画協会」の連中は熱心で社会的責任のある精神を基礎に相互に影響を及ぼしあい、その理論を完成させていった。彼らの理論はアメリカ初期の自然保護論者の仕事の上に築きあげられていくとともに、1930年代のルーズベルト政権の重要な議案の多くの基礎にもなっている。例えばT.V.Aの電化、地域開発、再定住、洪水対策、保護地帯の問題、植林など国家資源計画等々に影響を及ぼしている。現代風といえば“地域の生態学的バランス”を保全し都市を公害から防ぐことを提案しているのである。マンフォードを含め彼らの主張は『現代都市の展望』第14章の中で次のように語られている。

「大都市における生活がまさに窒息の危機に瀕しており、大都市はガンのような過大成長と過密化のために死滅しようとしているのを彼らも知っていた。彼らは他の都市論者のように、過大成長と過密を力強い経済の活動・社会的活気と誤って同一視することという事はなかった。そうではなく、電力網・ラジオ・自動車道路などが

より均衡をえた人口分布の型を可能にする上できわめて重要なものであり、これによって過密化した大都市よりもはるかに広範囲な地域に人口を分散させ、恒久的な母体となる緑地という形で田園の重要な資源をも保存することができ、郊外やさらに周辺にあるスラム地域の野放図な拡張と拡散のための自然の思索がことごとく抹消されてしまうのも防げる」(都市の挫折小史)と。

これこそまさにマンフォードが主張する“生技術期”の都市像なのである。このようにマンフォードに多大な影響を与えた人々は、他にもまだいる。田園都市の提唱者エベニーザ・ハワード、ニューヨーク・セントラル・パークの設計者オルムステッド、イギリスの都市計画家アウインやフレデリック・オズボーンなどの親交がマンフォードの都市に関する研究に幅と深みを与えた。やがてその成果として名著『都市の文化』が誕生することになる。

**1924～1925年** ニューヨーク住宅地方計画調査委員になる。また「図式調査」の地方計画特集号の編集者となったり、この頃のマンフォードの活躍はめざましく、自分自身で専門分野を「社会哲学者」と称していた。

**1926年** アルフレッド・クレイムボーグ及びポール・ローゼンフェルト等と一諸に『アメリカ・キャラバン』誌を編集したりしていた。この当時マンフォードは、ラディカルなエマソン流の社会主義者であったが、マルクス主義者ではなく、他方、エписコパル教会に所属したり宗教はエマソンやホイットマンのように伝統的ヒューマニストであったと語っている。

**1931年** 機械・都市・建築・社会生活・人間などについて、これまで研究しあためていたテーマを整理しはじめる。翌年にはグッゲンハイム奨学金を得て、4カ月間ヨーロッパで生活する。その間に、先にテーマをさらに発展させ、マンフォードの今日の礎となった数冊の著書をまとめあげている。この当時をふりかえり、『技術と文明』の序の中で「1932年までの私の意図は機械体系・都市・地方・集団・社会・人間などを一巻の書物のなかで取り扱うことであった」と語っている。

**1933年** この年の6月友人の作家ヴァン・ウィック・ブルックスにあてた手紙の中で「私の本は3冊以上に拡張されるであろう。第1冊は機械に関するもの、第2冊は

都市に関するもの、第3冊は人間についてである」と、さらに「ある意味で、私の生涯はこれら3冊の本を書きあげるために用意されているのである」といっている。実際にはこれがさらに拡張され『人生の案内』という第4冊目が誕生している。

これは、最近ジャン・ポール・サルトルがインタビューに答えた記事の中で、インタビューが「弁証法的理性批判を書くことで健康を損った」という間に答え「何んのために健康はあるのか、健康というやつは自尊心抜きでいえば『弁証法的理性批判』を書いた方がましだ、大部で緊密な自分にとって大事なものを書いた方がましだよ。非常に健康でいるよりは」と語っている。(朝日ジャーナル75'7-4) これは、人生を単に生きながらえるだけでは意味がないという点でマンフォードの言葉と奇妙に結びつくし、人生を闊ってきた偉大な先駆者の言葉だけに自信にみちてきもちがよい。

マンフォードの全体像を把握するポイントは、この時期の著書を熟読することである。以上の4部作を称し、マンフォード自身「生への復興 (Renewal of Life)」という名をつけている。この主著四部作についてマンフォードは「色を順次に重ねていく4色版のように、前の版の空白を埋めるばかりでなく、一枚の絵の枠の中におさまられたとはいえその色彩は暗鬱に染められてきた」と『人間の条件』のはしがきの中で語っている。第1冊と第3冊の間に第2次世界大戦を含む世界的大変動の10年間に挟まっているため、マンフォードの世界観にも多少のズレが見受けられるのも当然であろう。

**1934年** 『技術と文明』を出版、マンフォードの名声確立。この時期は、世界的不況の波が押しよせている最中で、当時のアメリカの地方都市は外部経済から孤立し、原始時代のような自給自足の生活を強いられていたという。世界的にみても、機械や技術の信仰が急激にうすれそのうえ、ニューディール政策が実施されるなど、社会全体は改革する気配が充満していた。マンフォードは、このような状況下で、アメリカ経済は二度と再び立直ることができないのではないかと危惧し、また機械の一方的信仰も弱まっていくに違いないと考えていた。

このような世界的不況に続き、第2次世界大戦が勃発した。世界は滅亡の危機を迎え、人々の不安感はつり

世界中が暗い陰鬱なベールにつつまれてしまった。このような時に『技術と文明』は出版されたのである。『技術と文明』は一躍世界中に迎えられた。これはマンフォードの生涯追及しつづけた「人間の生 (human life)」に関する視点が随処にみられ、限りない希望と夢にみちあふれているためである。さらに、この時代の絶望的な暗さも手伝って、「希望にみちた (hopeful)」本として高く評価されたのである。この項を書くに先だち『技術と文明』を再読してみても、マンフォードの人間に対する限りなき愛情と生にたいする関心の強さが全章に渡って表現されていることをあらためて感じたほどである。

この本が出版される以前の彼の作品は、前述した『ユートピアの系譜』を筆頭に『杖と石』『黄金時代』『ハーマン・メルヴィル』『褐色の10年』である。これらの著書に流れる視点は、『生の復興』シリーズの結実をみる文明全体への関心である。『杖と石』の冒頭には、マシュー・アーノルドの「文明とは何か。それは社会における人間の人間化である」、W・R・レサビーの「建築とは正しく理解すれば文明そのものである」という言葉が引用されており、マンフォードの視点がわかる。

**1938年** 『都市の文化』を出版。『都市の文化』は、マンフォードが都市について初めてまとめたもので、『技術と文明』に続くシリーズとして、「文明」と関連するもの「都市」をテーマに選び研究したものである。翌1939年第2次世界大戦が起り世界中の人々は絶望感にとらわれていった。しかしナチスドイツ占領下のポーランド、ネーデルラント、さらにギリシャなどの地下運動(レジスタンス)の人々の間で戦後の復興計画の青写真をつくるためのテキストとしてこの本は読まれた。その初版の一冊は“アウツビッシュ”にまで行き、生存してかえってきたといわれている。この本によってマンフォードは時代の寵児となり、苦闘しつづける人々に限りない希望を与えたのである。後世のある評論家が「もはや時代遅れのもの」といったとき、マンフォードは再版の序の中で「もし、この本が時代おくれなら、もっとそのような時代おくれのものこそ書かれる必要がある」と自信をこめて語っている。第2次大戦以後、戦争の影響によって荒廃しきっている道徳問題や核兵器の行方などについて、相互理解を深めるため精力的に執筆活動をしている。教

育には特に関心を示し、種々の委員会に属し、活躍している。その主なものは、1935年から1951年の間に、ニューヨークの高等教育委員会、アメリカ教育協会の教育養成委員会、スタンフォード大学の人文学の教授、ノースカロライナ州立カレッジの建築科の客員教授、ペンシルバニア大学の都市計画の教授等になっている。このうち1941～1951年の10年間は在野の評論家ではなく実際に大学教授となって教育にたずさわり、一方では“ニューヨーカー誌”などに建築に関する評論を書き、さらに宗教・政治・哲学・教育等多方面に渡って健筆をふるい、マンフォードの人生のうち最も油の乗りきった時代ともいわれている。

**1952年** 『芸術と技術』が、コロンビア大学バンプトン講座の筆録をまとめて出版された。この本ではカッシーラ、ジョージ・ミード、スーザン・ランガーなどの説を基に芸術や技術に対するシンボルの関係について論述しており、その成果がマンフォードの総決算と思われる『機械の神話』の大著につながっていく。

**1961年** 『歴史の都市、明日の都市』が出版される。前著の『都市の文化』が中世以後を対象としているのに対し、人類の原初時代から都市の芽ばえと、その成長過程を観察記述したもので、現代都市のもつ根源的な性格・特質を見つけたそうと試みているのがこの大部な著書の意図である。この本ではマンフォードが常日頃から主張している「学際的研究」の成果を縦横無尽に活用し、その博学ぶりに圧倒される。〈マンフォードの本はこれだけでなく、どの著書でもそうだが、引用した参考文献リストとその概説を、簡単明瞭に取りまとめ表現していることに驚く〉。エジプト、メソポタミアに関する考古学の研究をしながら、この本の想を練ったといわれている。

**1967年** 『機械の神話第一部・技術と人類の発達』を出版、『技術と文明』を出版してから以後、マンフォードの思想の進展はとどまるところなく拡がり、円熟さをまし1950年代頃から『技術と文明』の単なる改訂版ではなく長年研究しつづけてきた「文明論」の総決算にすべく、『機械の神話』は書かれた。『技術と文明』では原技術・旧技術・新技術期の三技術期に分け、原技術期の1000年頃から論じられているが『機械の神話』の意図は前述の三時代区分化があまり意味のないことから、人類史上

最も古い石器時代までさかのぼり、「技術と文明」の根源的な性格を明確にし、それが現代技術の反生命的な性格の根底になっていることを歴史的に解明しようと試みている。『技術と文明』を書き直そうと考えたのは戦後すぐであるという。その直接の動機については、『機械の神話第2部・権力のペンタゴン』の感謝の言葉の中で次のようにいっている。「私がマサチューセッツ工科大学建築学部客員教授として行ったセミナーが、本書の主題についての新しい考え方への刺激になった。そのセミナーで私は『技術と文明』で述べた基本前提を、新しい科学と技術の発展の中でまだ現代の不合理的要因について私が進ませたいようになってきた見解を、ピラミッド時代以降の発端から、われわれの機械志向的テクノロジーのなかで再点検した。しかし『機械の神話』の直接の執筆動機は、1962年ニューヨークのシチー・カレッジでそのような題目で行ったサポスネコフ講義にある」と第一部の表紙裏に主催者のサディレベッカ・サポスネコフさんとカレッジに感謝の辞を附している。

1969年 『エマソンの日記』の編集、マンフォードの思想像をみるに、彼の文学への興味を無視してはならない。彼の文章が全てリズムカルなものこの文学的センスをベースにしているからである。ハーマン・メルヴィルを愛読し、ホイットマン、ソロー、エマソンを尊敬している姿が、彼の著書の随処に現れている。

1970年 『機械の神話、第2部、権力のペンタゴン』を出版。大著『機械の神話、第1、2部』のテーマについては、マンフォード自身が次のようにいっている。『機械の神話』の基本的理念は少くとも輪郭だけであるが、『技術と文明』の中にあらわれている。しかし私には巨大技術の全面的な誤りをみて、我々のエネルギーを誤った方向に向け、豊で精神的に満足すべき生活を行う能力を台なしにする集団的な脅迫と強制について、検討したいと考えていた。もし過去数世紀の“標語が機械化の支配”であるとすれば、本書のテーマは月から地球へ帰還するとき、ジョン・グレン大佐がいったことば「人間にまかせよ」に要約することができる。

限りなく人間を愛し、人類の存続を希望し、「生技術」にのみ期待をはせるマンフォードの全思想が、この言葉に要約されている。そのようなマンフォードに対しタイ

ム誌は、いみじくも「バイオ・スカラー（生きている学者）」と称した。たしかに、マンフォードほど生々した学者はいないばかりでなく、彼が“生きているもの”“生命”“有機的なもの”，人間に対する限りない愛と尊重をもっていても意味しているのである。

1974年 マンフォードの活躍は未だ衰えることなく、昨年の春M. I. T大学の〈工学技術と文化セミナー〉で講演を行っている。その時の講演メモとして配布されたテキストが、1975年8月号の雑誌『世界』に掲載されている。テーマは“人類と太陽エネルギー”（生命に必要なだけのエネルギー）である。この論文は小論であるが、これまでのマンフォードの思想体系とくに『機械の神話』の中で論じている“メガマシン”ないしは“権力体系”という概念をベースに、権力経済から生命経済への転換について力説している。論文は75歳ともいえぬほど若さにみまぎっている。

最近はこのような講演をしながら晴耕雨読の生活をつづけ、目下「自殺伝」を執筆中であるという。各方面からその出版が期待されている。

#### 4 マンフォードの都市観（断片）

ここではマンフォードの都市観について論ずる余裕はないので、その一端をみてみよう。

都市に関するマンフォードの興味・研究は、一連のライフ・ワークの一部として実施されたものである。その成果は『都市の文化』を初めとし『歴史の都市・明日の都市』・『都市と人間』・『多層空間都市』へと引継がれさらに『現代都市の展望』へとまとめられている。なかでも『現代都市の展望』は、アメリカの都市の実情を凝視し、環境破壊していく様子を嘆き、その改革・改善の必要性を叫び主張している。そのはしがきの中で「都市に関する書物が爆発的に刊行されているにもかかわらずわれわれの都市の環境は悪化の一途をたどるばかりで、当局の自慢の種になっている業績も多くは大都市の解体・恣意的な郊外への拡散や地域の荒廃の速度を速めたにすぎなかった」と批難している。いまやアメリカだけでなく、世界中の都市が環境破壊に苦しみ、都市はもはや人間が住むに値いしないものになりかかっている。この

ような状況下で、マンフォードの主張は、アメリカの人々だけでなく世界各国の人達に都市の回復に努力することを強く訴え、これまでの行為の猛反省を促している。その声、その主張は、現代都市の難問に立ち向っている我々の導き手としてだけでなく、都市の破壊・破滅を真底から救おうとする救世主的な感じがする。

マンフォードの都市に関する意見の重要さは、単にこれらの都市環境破壊の実態を摘発するだけでなく、その問題解決の糸口や具体的提案を詳細に論述しているところにある。『都市の文化』では、戦争により荒廃し絶望しかけている人々に戦後の復興計画の手本になるものを提供し、『都市と人間』では、都市における建築物の持つ意味の重要さを力説し、『歴史の都市・明日の都市』では、都市がさまざまな要素を集積した結果生み出す便益や独特な魅力を各時代について実証的に論じそれらの都市がその魅力とひきかえに生み出す悪を辛うじて浄化してきたのはいつも潜在する村落であったと主張するなど、全体を通し都市悪の鋭い分析を行っている。『現代都市の展望』では、アメリカの都市の実態を基礎に現代都市が抱えている環境破壊の危機感を強く訴え、併せてその解決策の一端を提示している。マンフォードは語る「ローマは現代都市より貧困であったにもかかわらず、その街並みは、人間中心に形成され、いまでも生々している。我々は現代都市のもつ裕富差でもって、ローマに劣らない素晴らしい都市を建設することができるのである。ただその視点を「人間」におくことが重要である」と。この言葉でもわかるように、マンフォードの都市の視点は、「機械・自動車の支配する都市」ではなく、「人間の支配する人間中心の都市」にある。経済の高度成長下において我が国の都市が見失ってきた大切な視点がここにある。マンフォードはこの言葉だけでなく全著書を通じ都市を人間のために取戻すことを力説している。それだけに、我々都市行政にたずさわるものにとっては学ぶものが多い。マンフォードの諸著書を読み、その都市観や都市に関する視点をもう一度たどってみることはたいへん意義がある。そこには現代都市の難問に悩む我々に問題解決への糸口を与えてくれるエッセンスがある。それを参考にマンフォードを乗り越えていかなければ現代都市の難問を解消することはできない。そして我々は

『人間の変貌』の中でマンフォードが語る次の言葉をじっくりかみしめる必要がある。

「黙示録に示されたすべての人間の発展の終焉が、われわれの時代に起りそうになった」

## 5 ま と め

前述の略歴、その時代の背景でもわかるように、マンフォードは時代の荒波にもひるむところなく活躍し、その動きは極めてダイナミックである。タイム誌が名付けた「バイオ・スコラー」は名言である。人類を愛し、人間を信じつづけたマンフォードは、全体的に仕掛けも大きく、その叙述は色彩に富み、精彩のある、美しい文章とリズムで語られている。そこには、専門が違うがフランスの生んだ偉大な文学者・文明批評家ポール・ヴァレリーの詩文を連想させるものがある。ここではもう紙数も過ぎているので、彼の思想を知るうえで最もポイントとなるものとして、『技術と文明』『都市の文化』『人間の条件』『機械の神話、第1、第2部』の熟読をすすめることにとどめる。

マンフォードという思想家は、前述したように勉強すればするほど底の深さを感じ、手におえなくなる。それだけにマンフォードの全体像を、全思想を、把握することは大変な仕事である。むしろ丹念にその歴史観・人生観・都市観・機械観・文学観等々をまとめてみることであろう。私自身手始めとして都市観と機械観を取りまとめているので機会をみて公表したい。最後にこの論を整理するために生田勉教授の名訳訳書のあとがきやマンフォードに関する解説を利用させていただいたことを記し感謝の気持ちにかえたい。

## 参考文献

- (1) 『技術と文明』生田勉訳、美術出版社 1972
- (2) 『人間の条件』生田勉訳、弘文社 1971
- (3) 『都市と文化』生田勉訳、鹿島出版会 1974
- (4) 『機械の神話』(第1、第2部)第1. 樋口清訳、第2. 生田勉・木原我一訳、河出書房 1971
- (5) 『ユートピアの系譜』関裕三郎訳、新泉社 1971
- (6) 『歴史の都市、明日の都市』生田勉訳、新潮社 1969
- (7) 「朝日ジャーナル」1975、Vol. 17 No.28(7.4)、No.29(7.11)
- (8) 岩波書店「世界」1975.7